

イントロダクション： 古代ローマ社会は訴訟好きだったと言われており、コリントでも新たに裕福な階級の人々が増えるにつれますそのような傾向が強くなっていった。現代の私たちの社会でも民事裁判が娯楽としてテレビで流れていることを思えば想像しやすいだろうが、コリントの状況も何ら変わりなかった。また富や財産を重んじたコリント文化の中では裁判においても裕福で権力のある人々の方が恵まれない人々に比べ刑罰を免れていたようである。身分の低い人と高い人の裁判では、身分の高い人の方が断然有利であった。しばしば人々はただの復讐目的、あるいは、辱められ、侮辱され、名誉を傷つけられ、馬鹿にされるためにほんの些細なことでも裁判に引きずり込まれた。このような社会秩序の乱れが不幸にも教会の中にまで忍び込み、コリント教会の内部に影響を与えていた。

1. あなたがたの中には、仲間の者と争いを起こしたとき、それを聖徒たちに訴えないで、あえて、正しくない人たちに訴え出るような人がいるのでしょうか。(6:1)
 - a. 日常生活の中で争いや苦情はつきものである。人間が集団生活をする、遅かれ早かれ摩擦が生じてくる。
 - b. 違いを取り扱う際に基準となるべきは教会であるはずだが、残念ながらコリントの教会は良い見本となるどころか当時の社会的価値観をそのまま取り入れていた。コリント教会は自分たちの立場、目的を見失っていた。
 - c. 教会は聖いものとして召されている。つまり聖別され、この世とはかけ離れたものにならなくてはならない。しかし気を付けないと教会も神を認めないこの世的な基準や慣習に染まってしまう。
2. あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。(6:2)
 - a. この手紙からはパウロが何について書いているのかは厳密にはわからないが、おそらく特定の訴訟ではなく、一般的に些細な問題をこの世の裁判にかけることの問題性を指摘しているのだと思われる。
 - b. ここで大切なのはこれらはごく小さな民事訴訟であって、大きな刑事裁判ではない。民事事件と刑事事件には大きな差があり、犯罪事件はきちんとした機関によって取り扱われるべきである。
 - c. パウロが彼らの判定能力を疑問視していたのは、まずは少なくとも彼らの態度にそのような能力が見られなかったからである。今の時代の教会も気を付けないと、コリント教会やイエス時代の宗教指導者たちと同じように、民事事件と刑事事件を取り違えて扱ってしまう危険がある。
3. 私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。それなのに、この世のことで争いが起こると、教会のうちでは無視される人々を裁判官に選ぶのですか。私はあなたがたをはずかしめるためにこう言っているのです。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することのできるような賢い者が、ひとりもないのですか。(6:3-5)
 - a. パウロはつねに教会に対して、どうあるべきか、どのようなコールを受けているか、ということを確認している。
 - b. しばしば罪や罪ある行為というのは、私たちが使命を見失った時の副産物である。私たちはこの世の人生で満足するのではなく、神の御国を相続するために存在している。
 - c. 私たちが目先のことで永遠が見えなくなると、真の義や正義を見失い不当なさばきを行なってしまう。
4. それで、兄弟は兄弟を告訴し、しかもそれを不信者の前でするのですか。そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていらないのですか。ところが、それどころか、あなたがたは、不正を行なう、だまし取る、しかもそのようなことを兄弟に対してしているのです。(6:6-8)
 - a. このパウロの言葉は正しい文脈で理解することが大切である。パウロは教会がごく小さな問題をも裁判にかけることを批判しているのあって、「不正をも甘んじて受ける」というのは小さな問題についてのことである。決して不正を受けたりだまし取られること推奨しているわけではない。
 - b. パウロの行動は次の9-11節で述べられていることとは正反対である。このようなことを行なう不誠実なものは神の国を相続することはできない。私たちは罪がきよめられ、聖なる者とされ、義と認められた者として言葉と行動によってそれを示していこうではないか。